

夏のソノキ

息子のカノジョ

陽気婢
近親相姦
説話集2

R18
ADULT ONLY



息子のカノジョ

私は田辺美沙。

36歳のシングルマザーで、夫に先立たれてから中1の息子の慎一と二人、寄り添うように暮らしてきました。

親子の仲は良好で、息子は何でも話してくれます。

小6まではお風呂も一緒に入っていました。本人も恥ずかしがるようになり中学にあがるのを機に別々に入るようになりました。

でも最近、息子は家に帰るのも遅くなり、休日も友達と遊びに行くようになって…。

どうやら彼女ができたみたい。

私は（シンちゃんも、そんな年頃なんだ…）と少し寂しくなりました。いえ少しどころではありません。今まで私は息子を恋人のように思っていたのかもしれませんが。

親戚や友人から再婚話や、いい人を紹介するよとの誘いもあったのですが、他の男と付き合う気はなれず、息子が一人立ちするまではと自分の恋も諦めていました。…それまでは。

思っていたよりも早く、その時が来たのです。

息子の初恋を応援しようと彼女について色々と尋ねてみましたが、言葉を濁すばかり。仕方なく私は彼を見守りつつ、自分も子離れしなくては…と色々考え始めた、そんな矢先のことでした。

急に息子がふさぎこむようになりました。



最初は体調が悪いと言って学校を休み、そのまま何日もズルズルと…。病院にも行こうとしません。

…学校で何かあったのかしら。

私の度重なる問いかけに、息子はようやく話してくれました。例の彼女と別れた…。と。

先週末のデートで、初めて彼女の家を訪ねたらしいのです。私は知らなかったのでショックでした。

（もうそんな仲に…）

その時は向こうの両親が不在で、二人きりでいい雰囲気になって、息子は彼女にキスしていいか訊いたそうです。そして…彼女に拒まれたと。

それを聞いて私は、可愛い息子の心を傷つけるなんて何様かと、その娘に対してどうしようもない悪感情が沸き起こりました。でもすぐ冷静になって…。考えたらキスなんてして、その流れでもっとふしだらな行為に至らないとも限らないですから、息子の暴走を止めた彼女に感謝すべきなのでしょう…。私は気もちを落ち着かせて言いました。

「まだ中学生になったばかりだし、男女関係に臆病でも当然だわ。…仕方ないわよ」

「それだけじゃないんだ」息子は続けます。

「その日はそれで諦めて帰ったんだけど…」週明け、つまり今週の月曜日のことです。学校に行くとクラスの女子の間に話が広まっていました。

息子が彼女に、セックスさせろとしつこいのだと。

「そこまでは言っていないのに」

彼が必死に弁明しても、クラスの誰も信じてくれません。

「本当に言っていないんだ。：確かにそう思っていたのは認めるけど」

彼は居づらくなつて、火曜から学校に行く気が起きず寝込んでしまった：そういうわけだったのです。

確かにそう思っていたのは認めるけど：。そう思ってた、つまり彼女とエッチしたかったのは事実なのね。

彼女の嘘を許せないと思うと同時に、嫉妬に近い感情が渦巻くのを私は抑えられませんでした。十代の子が友達ウケを狙って話を大きくするのは、よくあることなのかもしれません。でもそんなノリだけで、私の息子を苦しめるなんて：。

「そんな子と付き合うのは、もうやめなさい」

ママが代わりに：。そう言いそうになるのを、ぐつと堪えました。

「もう別に何とも思っていないよ。なんか女子と付き合つて機嫌とるの、疲れちゃった。ごめんなさい何日も学校休んじやつて。様子を見て行くようにするからさ。もうちょつとだけ：」

「いいのよ。居たいだけ家に居ても」私は息子に近づくと彼を抱きしめました。

「ママはいつでもあなたの味方よ」

そんな風に息子を抱きしめるのは久しぶりのことでした。

前にハグした時よりずっと成長して、もう背丈も私と変わりません。肉づきは私の方が良くて、彼は骨ばっているが所々に少年っぽい筋肉のしなやかさを感じます。しばらくそうしていると、だんだん胸が高鳴り、体の奥から何か官能の潮のようなものがせり上がってきて戸惑いました。

「シンちゃん：。」

私はどうしたいのか。

「ママがその子の、代わりになれないかな」

…したいことがあるなら、ママになんでもしてくれていいのよ。

そう言おうとして口に出たのは「し…」だけでした。

息子はじつと私の顔を見つめています。

それからいったん視線をゆつくり下に落として、私の胸や下半身のあたりで行ったり来たりするが分かりました。からだ全体を舐め回すように…。

彼が女として私を見ている。

そう思うと、天に舞い上がりたい気分でした。

やがて彼はうわずった声で、遠慮がちに私にたずねてきました。

「キスしてもいいの？」

いいわよと答える代わりに、私は唇を彼の唇に重ねました。

濃厚なキスでした。

すぐに息子は舌を私の口の中に差し込んできました。

私も自分の舌を絡めるようにして迎え入れ、顔を傾け、口を大きく開けたりすぼめたりしながら、互いの濡れた唇がより深く組み合わさるかたちを探りました。そのうちに、腰に当てられていた息子の手が、服の上からおそるおそ

る私の下乳のあたりに触れたかと思うと、またすつと元の位置に戻りました。私はもどかしくなって、自分から胸に導きました。

許しを得たとばかりに息子は、私の乳房を揉みしだきます。

そして大胆にも、今度は着ていたシャツの下から手を入れてブラをたくし上げ、生の乳房を包み込むようにして揉み始めました。

「シンちゃん…」

私は我慢できなくなつて唇を離し、シャツとブラと一緒に脱ぎ捨てました。

「…おっぱい舐めて」

私の豊満な乳房を見て、息子はためらうことなくむしゃぶりつきました。

片方の乳首を優しく咥え込み、舌の先で舐め回しながら、もう一方の乳房を揉んでいます。

私は彼の頭を抱きかかえるようにして、何度もキスを浴びせ、その合間にも囁き続けました。「シンちゃんのしたいようにいいよ。…したいように。ママ、しんちゃんのためなら…」。

でも本当にしたくて堪らなくなっているのは私のほうでした。

私は彼の股間に手を伸ばしました。ズボンの中が硬く強張っているのが丸わかりです。触るとビクツとして私の手を掴み、そのまま胸から顔を離しました。

すぐさま彼がボタンを外してチャックを下ろし、おもむろに履いていたズボンとパンツを脱ぐと、勃起したおちんちんが私の目に飛び込んできました。



（シンちゃんのおちんちん…。こんな立派に…）亀頭が全部は剥けきっていませんが、カリの張った形はもう十分に大人のそれです。

私は再び彼のものに手を添え、乾いた唇を舌で湿らせるようにして近づけました。

その時です。息子は「待つて」と小さく叫んで、腰を私の胸の方に突き出しました。

「ダメ」あつ…と声を上げるや否や、彼の腫れ上がった先端が私の乳房に触れて、その瞬間白いものが亀頭の裂け目から放たれたのです。

ビュビュツ。

おちんちんを握った手に、彼の中からほとぼしる精の動きが伝わってきました。

何度かに分けて波のように繰り出される飛沫を、私はおちんちんの向きを自分の谷間に向けて受け止めました。

（ああ出ちゃった…）

惜しいと思うと同時に愛おしさを感じて、私が私は息子が全てを出し切るのを待ちました。

ようやく息を整え、「ごめんなさい」と謝る彼に私は「いいの」とキスをしました。

胸の谷間に滴る精液を、惜しみつつティッシュで拭うと、私はブラを着けて立ち上がりました。ずっと息子の視線を感じつつ…。そして「またいつでもしたくなったらママのところに来てね」と言い残して部屋を後にしたのです。

夕飯の買い物に出たついでに、私は薬局でコンドームを買いました。

（さっきのあれは事故のようなもの……。しんちゃんも我に帰ったみたいだし、もう私に手を出したりしない。これはもしもの時の保険よ）そう自分に言い聞かせましたが本音では、私が彼を欲していたのです。息子に抱かれ、あの硬くいきり立った肉棒に貫かれることを思い描くだけで下腹部のあたりがじんじんして、私は久しく忘れていた女が目覚めるのを感じていました。

妄想に翻弄されながらもなんとか調理を終え、息子を呼んで夕食をとりました。

「大丈夫？」 「さっきはごめんね」 「まあ人生いろいろあるわよ」 ……当たり障りのない言葉で、どっちに転んでもいいように話しかけますが、彼は「うん」とか「ううん、僕の方こそごめん」とか言ったきり、あまり会話が続きません。

ただ食欲はあるようで、ガツガツ食べてくれるのが救いでした。

私もつられて普通に食べてしまった……。

でもこれで、またいつもの日常が戻ってくるのかもしれない。

寂しくもあるけど、それも悪くないと思いました。

テーブルの上の食事をあらかた平らげた後、コップに注がれた水を飲み干した彼に「なんかテレビでも見る？」と尋ねました。

彼は首を振り「ママ」と、かすれた声で言ったのです。

「あとでママのベッドに行ってもいい？」

私は先に息子にお風呂に入るよう言いつけ、その間に夕食の片付けを済ませ、次に自分がシャワーを浴びる間、寝室のベッドで待つようにと伝えました。

そして念入りに体を洗って裸にバスタオルを巻いただけの格好で私は寝室のドアを開けました。ベッドの上で息子が、布団にくるまり私の方を見つめています。

私が布団に体を滑り込ませると、彼はいきなりバスタオルをはいで抱きしめてきました。彼も裸です。

「ママ」

裸で抱き合ったまま私たちは、貪るようにキスをしました。

昼間のお互いの気持ちを探るようなキスとは全然違って、ただ互いの欲望をむき出しにした激しく荒々しいキスです。

見て。

わかる？

ママ、こんなにあなたを欲してるの。

もうどうにかなっちゃいそう…。

私の太ももや股の茂みの辺りに硬くなった彼のモノが当たります。もう十分に硬くなっています。露出したところが敏感になっているのか、肌が触れるたびに息子は「んっ」と小さく呻いて、腰を後ろに引きます。

それが可愛くて私は逃さないようにしつかりと、彼のお尻に手を回します。抗うように息子は体を下にずらして、お返しに私の性的な部分を責め始めました。

右手で私の左の乳房を揉みながら、右の乳首を舐め回し、左手はあそこのヒダに…。

（私も）…と、彼のペニスに手を伸ばしますが、届きません。

諦めて背中をベッドにあずけ、彼が楽にしたいことをできるよう身をまかせます。

差し込まれた指が、熟れきった蜜壺をかき回しています。

まだ慣れなくて戸惑いを感じさせる手つきが好ましく、でも時折クリトリスに触れると心地よい痺れが全身を走り、膣の奥からじわじわと歓喜の雫が湧き上がってくるのがわかります。

（この指に代わって、彼のおちんちんが私の中に…）

その期待だけでもめまいがするのに、現実の体も今や快感に翻弄されて、もうまともに物が考えられなくなっています。

まだ理性が残っている今のうちに準備したほうがいいかもしれません。

「待って」

彼が入浴している間に枕の下に忍ばせておいたコンドームを、私は手に取りました。

（性教育。…これは実践的な性教育なの）

「つけてあげる」

指先で切れ込みを広げるようにして、中からゴムを引つ張り出します。彼が半身を起こしてペタンと座り込み、片手を背中の方へ。赤く充血したピンク色のおちんちんが上を向いてはちきれそうになっています。

そのまま口に入れてしゃぶりたくなるほどのいとおしきです。

でも昼間のように、ちよつとした刺激で暴発するのは避けたい。

「ちよつとだけ我慢してね」

すぐに私はコンドームを亀頭の部分に被せて、スルスルと根元まで優しく包んであげました。

その間にも息子は「ママ…」と身をよじつて耐えています。

「いいわ。いつでも…」私も、もう待ちきれません。

「ママの中にシンちゃんのおちんちん、ちようだい」

私は股を大きく開き、両膝を立てて寝そべりました。

彼は片方の手で体を支え、もう片方の手で握ったおちんちんの先端を秘所に当てて確かめながら「ここ？」と聞いてきます。

私も自分の指で小陰唇を広げるようにして指し示します。

「ここよ。そこ…。ああ…」

息子が中に入ってきました。

「ママ。…ママ」そう言つて息子が腰を打ちつけます。

「ママのなか気持ちいいよ。また、すぐにいっちゃいそう」



彼のペニスが膣の中を行き来するたびに、ポンプのように愛液が溢れてきます。

「ああ、ダメよ。シンちゃん、もつと…」

ここへ来てタガの外れた私の欲望は際限なくなり、息子を思う母親ではない女の本音が顔を出し始めたのです。

「で、でも僕もう…」

腰の動きが激しくなったかと思うと、最後に深く押し込んだまま息子は、息を詰めて私をギュッと強く抱きしめました。

私に深く侵入したあれがヒクヒクと、しゃくりあげているのがわかります。

…イッちやったの？

（イッちやったのね…）

私は快感のくすぶりに身を焦がしながらも、彼に応えるように抱きかえしキスを浴びせます。

どくどくと彼の全身が脈打ち、やがて静まっていくまで、そうして抱き合っていました。

「すごく良かった」

呼吸が落ち着くと彼は、私の股の付け根からゴムのついたペニスをゆっくりと抜き去って、肩に頬を寄せるようにして言いました。

「そう。…なら良かったわ」

「ママごめんなさい。先に気持ちよくなっちゃって…」

「ううん。ママも気持ちよかったわよ」

本当でした。息子に私の中で絶頂を迎えさせたそのことで私の心は満足でした。確かに肉体がまだ不完全燃焼だったのは認めますが…。

「でもママ、もつと…って」

「いいの。シンちゃんのよがってる顔が見れたから」

「僕もママをよがらせたい」

息子がまた私のある所に指を突っ込みます。

「ママをもつと気持ちよくさせたいの。…ねえ、ここ舐めてもいい？」

言うが早いか、私の太ももの間に顔を近づけます。

「シンちゃん」

彼が指を私の膣に出し入れしながら、周りのビラビラの部分に舌を這わせます。

再び火のついた私は上体を彼の足の方に運び、お返しにフェラチオに臨みました。

ずり落ちそうになっていたゴムを外して、溜まった精液が溢れぬよう口を結びゴミ箱に向けて放り投げます。

少しくんにやりした息子のアレを口に含み、精液を舐めとって綺麗にします。くぐもった声で息子が反応しているのがわかります。さつき短い間でしたが私の中で脈打ち、快楽を与えてくれた肉棒です。私は歯に当たらぬよう注意深く、愛情を込めて、舌と唇でねつとりと包み込んで、彼に擬似的な挿入感を与えるようにしました。

「ママ…。ママ、気持ちよすぎるよ。…ちよつとペース落として」

…調子に乗りすぎたみたい。

でも早くも復活しかけている彼のペニスに、嬉しくなります。

息子の舌がクリトリスを探し当て集中的に攻めてきます。中指で小刻みに濡れた膣を突き、余った指と舌とで突起を挟んで刺激します。…空いたもう一方の手指で私の乳首の先をふるふる押しながら。

「シンちゃん、そこ…」

私の声に気を良くしたのか、彼はさらに舌と指の動きを早めます。

お互い拙い愛撫なのかもしれませんが、夢中で貪る彼の姿は私の官能を十倍にも百倍にも刺激してオーガズムが高まってきました。…もういつでもイケそうです。

今度こそ…。

私は枕の下からもう一つコンドームを取り出して、完全復活した息子のおちんちんに被せました。準備の整ったペニスを開いた股の付け根に導きます。

さつきの初めての挿入は余裕がなくてあつという間の幕切れでした。でも今度は…。唾液とマン汁でぐちゃぐちゃになった割れ目に、はちきれそうなおちんちんが滑らかに沈んでいくのを見て、私は息子と一つになる感覚に打ち震えました。

「シンちゃん」

「ママ」

またキスを交わして舌を絡ませながら彼は、私のなかを味わうようにゆっくりと掻き回します。

息子の手がせわしなく乳房を揉んだり乳首を摘んだりする間も私は自分の体の奥深くに打ち込まれた杭の発する精気に酔いしれていました。

やがて彼が「ママ、もうすぐ…」と言って、充填されたエキ스가出口を求め駆け上る合図に、はあはあ息を切らし、荒ぶったピストン運動を始めると、すでに私は快楽の波に翻弄され、とろけるような感覚に包まれ、肉体の境界すら曖昧になっており、白痴のように口を開きよだれを垂らして、涙で滲む影のような彼を焦点の合わない目で追いつながら「いい…。いい、シンちゃん好き…。ああ…。いい。シンちゃん好きなの…。…。いいの…」と、うわごとのようにただ繰り返していて――。

「ママ」

息子がこの日、三度目の射精をとげた時には、もう私は失神していたのです。

気がつくと私の上には毛布が掛けてあり寄り添うように息子が眠っていました。

二人とも素っ裸です。シーツの腰の辺りがまだ湿っています。

（やつちやつた…）

後悔はありませんでした。むしろようやく本当の自分と向き合えたような、そんな気がしていました。トイレに立とうとするのを息子が引き留めました。

「ママ」

私は振り返って軽くキスします。

「ごめん。ちよつとトイレ」

ベッド脇のゴミ箱に、口を結んだコンドームが二つ入っています。：ちゃんと片付けてくれたみたい。用を足してベッドに戻るなり、息子が抱きついてきました。

「ねえママ。また、してもいい？」

おちんちんを触ると、なるほど勃起しています。：ちよつと様子が違うのは、ちゃっかりコンドームをつけていることです。私がトイレに行ってる間に置いてある場所を見つけたのでしよう。

得意げな顔で「ねえママ：」とおねだりする彼。

「ママが断ると思う？」

そう言う息子は「ううん」と言っ唇を奪い、そのまま覆いかぶさって私の中に入ってきました。

「エッチなママでよかった」

彼の腰に足を絡ませ、体をくねらせて私も愛を貪ります。

そうやって一晩の間に何度、体を重ねたかわかりません。

目が覚めたら彼が後ろからしがみついている、おっぱいを揉みながら私のマンコを突きまくっていたこともありました。快楽のつぼと化した下半身に意識がよどみつつも、バックから犯されていると、息子の顔が見えない不安から、つい声を上げてしまいます。

「シンちゃんママのこと好き？…ママのおまんこ気持ちいい？」

「うん。好き…ママ気持ちいいよ。ママ…僕だけのママ。ずっと独り占めにしたい」

「ママもシンちゃんのこと好き。シンちゃんのおちんちん素敵。おちんちん…もつと…。あああああ…！」

気が遠くなるほどに、欲望に身をまかせて何度も何度も登りつめ、体力を使い果たして、フラフラになりながらもキスをしてとろけるように眠りました。

朝が来て、勃起しているおちんちんを、ちよつとした悪戯心といとおしむ気持ちで、もてあそび舐めまわしている…途中で彼も起きたみたいで、私のアソコに指を突っ込んでジュポジュポ音を立てていじり始めます。

（ああ…。また入れたくなっちゃう）

無雑作に開いたコンドームの箱。…残りは数個。

（一晩でこんなに使っちゃったんだ…。また買いに行かなくちゃ）…って言うか、このペースでエッチしてたら、つけてても危ないかも。ピルを処方してもらった方がいいかしら。そしたらナマで、シンちゃんのペニスを…。

そんなことを考えながら、ゴムを被せたおちんちんをアソコにあてがうと、息子に「お腹すいたでしょ？…これが終わったらご飯作るからね」と妙に所帯じみたことを言っていました。

それを彼は軽く受け流して「ご飯よりママの方が美味しい」



「お腹減っちゃうよ？」私もしつこく食い下がりながら「…でもママも、シンちゃんのおちんちん美味しいよお…」優しい言葉に乗せられて甘えた声を出してしまいます。

「いっぱい食べさせてあげるね」

粘ついた腰遣いと、キスの応酬で、溢れる快樂の脳汁に全身を浸らせながら、私たちはまたもや絶頂を迎えたのです。

向かい合って遅い朝食をとっていると、昨日からの一夜のことが思い出されて、時おり目を合わせては、はにかみ笑いをする二人は、本当に恋人になったみたい。

ずっと一緒に暮らしていても知らずにいた、お互いの姿を知ったのです。

一番恥ずかしい自分を受け入れてもらえた安心感で、高揚感があります。

「ママ」

パンケーキ二枚と人参ジュースをきれいに食べ終えた息子が、まだ口を押さえてもぐもぐと頬張っている私に言いました。

「今度デートしよう」

嬉しい誘いに胸がいつぱいになりつつ、平静を装い答える私。

「いいけどお友達に見つかったら、冷やかされちゃうんじゃない？」

「見せつけてやりたい」

「マザコンだって…」

「だってマザコンだもん」

こんな毎日がずっと続けばいいのに。

そう思いながら差し出した手に息子は手を合わせて立ち上がって、私の元に身を寄せてハグしてくれました。

いつまで続くかわからないけど、そのうち他に誰か好きな子が現れるかもしれないけど、それまでは私が息子の彼女です。

☆陽気婢の作品情報サイト

<http://youkihiworks.mystrikingly.com/>

☆陽気婢Twitter

<http://twitter.com/youkihi>